

Nirvikalpapraśadhāraṇī

——梵文テキストと和訳——

松 田 和 信

【略号】

- NPD* : *Nirvikalpapraśadhāraṇī* (*Avikalpapraśadhāraṇī*).
*Ch*¹ : 『入無分別法門經』施護訳（大正 No. 654, vol. 15, pp. 805–806）.
*Ch*² : 『入無分別総持經』訳者不明敦煌写本¹⁾.
DhDhV : *Dharmadharmatāvibhāga*.
KT^D : Kamalaśīla's *Ṭīkā* to the *NPD* (Derge ed., Tohoku No. 4000, Ji 123a³–145b⁵).
KT^P : Kamalaśīla's *Ṭīkā* to the *NPD* (Peking ed., Otani No. 5501, Ji 146b⁶–174b¹).
MS^G : Gilgit Manuscript of the *NPD* (Delhi Collection, No. 16, Facsimile 1668–1681).
MS^L : Leningrad (St. Petersburg) Manuscript of the *NPD* (Ms. Ind. VII. 23–420).
T^D : Tibetan Tr. of the *NPD* (Derge ed., Tohoku No. 142, Pa 1b¹–6b¹).
T^P : Tibetan Tr. of the *NPD* (Peking ed., Otani No. 810, Nu 1b¹–6b⁸).

まえがき

かつて筆者は、ヴァスバンドゥ（世親，Vasubandhu）の『唯識三十頌（*Trimśikā Vijñaptimātratāsiddhiḥ*）』に対するスティラマティ（安慧，Sthiramati）の注釈の中で、無分別智と後得智の典拠として援用される *Nirvikalpapraśadhāraṇī* (*NPD*, 『入無分別法門經』) なる大乘經典について取り上げたことがある。その中で筆者は、梵文原典の知られていなかった *NPD* の半分ほどの量の梵文写本断簡をニュー・デリーのギルギット写本コレクションより探し出してローマ字転写を示し、さらにスティラマティに引用された箇所と同じ文章がその後の諸文献にも引かれること、‘*vijñaptimātra*’ などといった表現が見られることから分かるように *NPD* は唯識思想の影響下に成

1) 上山大峻, K. W. Eastman & J. L. Broughton, “The *Avikalpapraśa-dhāraṇī*: The Dharani of Entering Non-Discrimination”, 『龍谷大学仏教文化研究所紀要』22集(1983), pp. (32)–(42). なおこの論文中に発表された漢文テキストは、上山大峻『敦煌佛教の研究』（法蔵館，1990），pp. 626–629に修正のうえで再録されている。

立したこと、また現時点で *NPD* はスティラマティ以前の文献に直接的には遡りえないが、チベットにおいてマイトレーヤの五部論（五法）のひとつに数えられる『法法性分別論（*DhDhV*）』に関連する記述があること——従って、これは『法法性分別論』の成立を考える上でも注目すべき——などを指摘しつつ *NPD* について若干の考察を加えた²⁾。

その後現在に至るまで、*NPD* にとっては幸運なことが続いた。*NPD* の漢訳は、宋代の施護による読むに耐えない杜撰な翻訳が一本あるのみであったが、1983年に龍谷大学の上山大峻教授らによって新たな漢訳が敦煌写本中に発見されたのである³⁾。さらにその3年後、筆者は、ロシア科学アカデミー東洋学研究所の旧レニングラード（現サンクト・ペテルブルグ）支部の管理するネパール系梵文写本コレクション中に、今から約百年前、チベットのダライラマ13世より当時のロシア皇帝ニコライ二世に贈られた *NPD* の新たな写本を発見し、そのマイクロフィルムを取り寄せることができた⁴⁾。また *NPD* は、後代のインド・チベット仏敎文献において種々な場面で引用されていることも判明しつつある。特に頓悟・漸悟の問題にかかわっている⁵⁾。

このように資料が整いつつある中で、*NPD* の梵文写本の発見者として、まずは新たな写本に基づいてテキストを作成し、今後の研究の基準となる第一次資料を学界に提示することを目的に本稿は企てられたものである。従って、ここではテキストと和訳の提示にとどめるが、*NPD* をめぐる諸問題については、本稿に示されるテキスト

2) 拙稿「*Nirvikalpa-praveśa-dhāraṇī* について——無分別智と後得智の典拠として」『仏敎学セミナー』34号（1981），pp. 40-49，以下〔拙稿1〕と省略。これが書かれたのは今から15年前のことであるが、筆者が梵文写本に言及した最初のものである。写本など直接読んだことのない者にとって、最初にギルギット写本を取り上げるなどというのは無謀以外の何物でもなかったが、今読み返してみると確かに誤読も多い。さらに残念なことに誤植も常識の範囲を越えている。本稿末の資料編に掲載される新たなローマ字転写をもって訂正にかえたい。なお当時、松村恒氏（現在親和女子大学）より筆者のローマ字転写の誤りについて、ていねいな御教示を頂いた。私事におたがが、偶然にも、グプタ書体で書かれた写本中の一連の文字が「*vijñaptimātra*」と読みうると確信した時の感激は忘れられない。この語は、資料編 MS^c の1676 (13a³) に含まれる一文中に見られるものであるが、良くも悪くも筆者の写本研究の出発点がこれである。

3) 前掲注1参照。

4) 写本の所在および入手の経緯等については、拙稿「ダライラマ13世寄贈の一連のネパール系写本について：『瑜伽論』撰決撰分梵文断簡発見記」『日本西蔵学会々報』34号（1988），pp. 16-20を参照して頂きたい。以下〔拙稿2〕と省略。

5) 例えば、Luis O. Gómez, “Purifying Gold: The Metaphor of Effort and Intuition in Buddhist Thought and Practice”, *Sudden and Gradual (Studies in East Asian Buddhism 5)*, (Honolulu 1987), pp. 67-165, 特に p. 108では *KT* の記述に言及している。他に、G. Mala et R. Kimura, *Un Traité tibétain de Dhyāna chinois (Chan 禅)*, (Louvain 1988) p. 46参照。なお、*NPD* の内容とも関連するが、唯識文献に見られる無分別智の持つ諸問題については、袴谷憲昭「唯識文献における無分別智」『駒沢大学佛敎学部研究紀要』43号（1985），pp. (41)-(78) 参照。*NPD* にも言及している（pp. 74-75）。

を基に別稿にて考察することにした。

1. 解 題

NPD は、無分別界に入る次第を説いた短い經典である。その成立はすでに考察したように⁶⁾、現時点ではスティラマティ以前の文献中に直接的にはトレースできない。内容的にも唯識思想、しかも vijñaptimātra の語が用いられることから（テキスト第13-14節）、唯識思想の完成期以降にその影響下に成立した後期大乘經典の一つであると思われる。例えば唯識関連でいえば、『解深密經』の經名と、經中に現れる対告衆の菩薩名がその經典の内容を暗示しているように、本經においても「無分別光 (Avikalpaprabhāsa)」という名前の菩薩が世尊に無分別界に入る順序を尋ねるという形式で説述がなされ、いかにも後期の論書的性格を持つ經典にふさわしい。なお *NPD* 自体を対象とした研究はいまだなされていない。

ギルギット写本 (MS^G) 1931年、カシュミールのギルギットで発見された大量の梵文仏教写本のうち、ニュー・デリーに保存されている写本は、ラグ・ヴィーラ (Raghu Vira) とローケーシュ・チャンドラ (Lokesh Candra) 父子によって、両氏の主催する『シャタピタカ・シリーズ』の第10巻（全10分冊）に影印版の形で出版されたが⁷⁾、本經の断簡は、その第7分冊に全16葉のうち7葉（写真番号1668-1681）が収められている。残り9葉はすでに失われたものと思われる。貝葉形樺皮に典型的なギルギット・バーミヤーン・タイプ I 書体（あるいは Round Gupta Brāhmī script）で書かれている。年代的には、ネパール系写本よりはるかに古いものではあるが、この写本については残念ながら誤写が多く、信頼性に欠ける。

ネパール系写本 (MS^L) 筆者が旧レニングラードより発見した本經のネパール系写本は、3葉よりなる紙本である。わずか3葉の写本ではあるが、カタログによると⁸⁾、

6) 拙稿1参照。

7) Raghu Vira & Lokesh Candra, *Gilgit Buddhist Manuscripts (Śatapiṭaka Series, vol. 10) 10 parts* (New Delhi, 1959-1974). 1-2分冊のみ合冊されて1970年に再刊されている。さらに昨年 (1995) 10分冊を3冊にまとめ、新たな二万五千頌/一万八千頌『般若經』断簡73葉（写真番号3369-3514）を末尾に付け加えて再刊されたが、印刷状態はよくない (*Bibliotheca Indo-Buddhica Series*, Nos. 150-152)。

8) N. D. Mironov, *Catalogus codicum manu scriptorum Indicarum qui in Academiae Imperialis Scientiarum Petropolitanae Museo Asiatico* (Petropoli 1914, Rep., New Delhi 1984), pp. 330-331, Ms. No. Ms. Ind. VII. 23(420). カタログでは、これが *NPD* と比定されているわけではない。この写本と一緒にされて保存されている一連のネパール系写本断簡（『瑜珈論』『撰決分』等）については、拙稿2参照。

サイズは56×8.5 cm とあり、横長の巨大な紙本である。片面に8行づつ書かれているが、第1葉の表は空欄で、本文はその裏面より始まる。最終第3葉の裏面4行目で本文が終わるが、その下は空欄のままで、これに続いて別文献が書写されているわけではない。またこの写本は近代の紙本ではなく、11-13世紀のネパール系貝葉本に見られるような古い文字で書写されている。この写本は完本ではあるが、残念なことに3葉とも左端が破損し、筆者の計算によると、一概には言えないが、各行18音節前後が失われている。ギルギット写本に比べると書写も正確で読みやすい⁹⁾。

漢訳とチベット語訳 本經の漢訳については、施護訳(Ch¹)が知られているのみであったが、上述のように、上山教授らによって敦煌写本中より発見された新たな漢訳(Ch²)は、施護訳と比較すべくもない良好な翻訳である。しかし敦煌写本によく見られるように首部が失われ、訳者の名は知られない。ただ末尾は残っており『入無分別総持經』の經題がつけられている。チベット語訳は、ジナミトラ等によって翻訳された、チベットにおける仏敎傳播初期のもので、『デンカル目録』に掲載されている¹⁰⁾。本稿ではデルゲ版(T^D)と北京版(T^P)を参照した。なおチベット大蔵經には、カマラシーラ(Kamalaśīla)による本經の注釈(KT)が収められているので、こちらも参照した。

經名について 本稿では經名を *Nirvikalpaṇḍaravāṣaḍdhāraṇī* としているが、これはスティラマティの引用に従ったままであって(拙稿1でもこの名称を用いた)、さしたる根拠があるわけではない。むしろ、他文献での引用、あるいはチベット語訳に示される梵文タイトルは、いずれも本經の名称を *Avikalpaṇḍaravāṣaḍdhāraṇī*、あるいは省略して単に *Avikalpaṇḍaravāṣa* としている。ただし、本稿で示す梵文テキストを見れば分かるように、本經自体の中で 'nirvikalpa' と 'avikalpa' は混用されている。ところで、本經では、經名に「經(sūtra)」ではなく「陀羅尼(dhāraṇī)」という名前が付いている。しかしNPDは密敎文献ではない。ここにはいわゆる陀羅尼・マントラの類は全く見出されない。寡聞にして他にこのような例があるのを知らないが、この場合の「陀羅尼」の語は「短い要約的經典」の意味で用いられているのではなかろうか。なお、旧レニングラード写本に奥付はないが、ギルギット写本のみ、その末尾で經名を

9) これまでも筆者は、事情が許す限り使用した写本の写真を掲載するように努めてきたが、この旧レニングラード写本については、個人的な研究発表の許可は得ているものの、それが写真掲載の許可まで含むのかどうか現時点では不明なため、今回は掲載することができない。ただし、筆者の手許にある写真をコピー等の形で個人的にお見せするのは可能であると思われるので、写真の必要な方は筆者まで連絡頂きたい。

10) 『デンカル目録』M. Lalou ed., No. 197, 芳村修基『インド大乘仏敎思想研究』(百華苑, 1974) p. 135, No. 196.

Avikalpapraśeṣaṃ nāma mahā(yā)nasūtra(m) と記し、「陀羅尼」のかわりに「大乘經」の語を附している。

2. テキストの提示

以下に提示する梵文テキストは、旧レニングラード写本を底本にして校訂されたものである。内容に従って全体を17のParagraphに分割した。破損のため失われた部分は、主としてチベット語訳を根拠に想定した。その場合、対応するチベット語訳を注記しておくが、想定部分は括弧に入れ、それらがあくまで筆者による復元案にすぎないことを示した。ただし、イタリック体の箇所は筆者の想定ではなく、ギルギット写本の平行箇所より補われたものであることを示している。旧レニングラード写本とチベット語訳は一部を除いてよく一致するが、ギルギット写本については、相違が激しく、これと同列に見ることはできない。旧レニングラード写本、あるいはチベット語訳に用いられた原典とは異なる系統 (recension) に属する写本と見なすべきであろう。従って、旧レニングラード写本の欠落部分を、ギルギット写本を根拠に復元することには大いに問題があるが、ここではチベット語訳を常に参照しつつ便宜的に使用したと理解して頂きたい¹¹⁾。

Sanskrit Text of the *Nirvikalpapraśadhāraṇī*

[1] (1b¹) (evaṃ mayā śrutam ekasmin sa) maye¹²⁾ bhagavān rājagṛhe virahati sma / sarvatraidhātukapratiṣiṣṭānirvikalpadharmadhātugarbhe prāsāde mahatā bhikṣusamghena sārddham mahatā ca bodhisattvasamghena / tad yathā avi(ka)lpena ca bodhisattvena mahāsattvena / avikalpaprabhāṣena ca bodhisattvena mahāsattvena / avikalpaca(1b²) (ndrena ca bodhisattvena mahāsattvena / nirvikalpavire)ṇa¹³⁾ ca / nirvikalpadharmanirdeśakuśalena ca / nirvikalpasvabhāvena ca / nirvikalpamatinā ca / nir-

11) なおふたつの写本のローマ字転写を本稿末に資料編として付け加えておくが、以下のテキストでは、ローマ字転写において 'sic' の記号を入れた箇所は訂正し、また { } 内の不要文字は削除し、[] 内の文字については括弧を取り去った。さらに写本に現れる dharmma, sārddha, suvarṇa, tatva, satva 等の語形は正規形に戻し、サンディもできる限り正規形に訂正したが、それらについてはいちいち注記しない。ローマ字転写を参照して頂きたい。

12) T^p, T^d, 'di skad bdag gis thos pa dus gcin na / T^p, T^d ではこれに先だって sangs rgyas dang byang chub sems dpa' thams cad la phyag 'tshal lo / (namah sarvabuddhabodhisattvebhyah) という一文が入っている。写本の欠落スペースからすると、恐らく写本にも同様の一文があったと思われるが、本文とは直接関係がないので省略する。

13) T^p1b⁷⁻⁸, T^d1b⁴, rnam par mi rtog zla ba dang / rnam par rtog med dpa' bo dang / bodhisattva, mahāsattva の語はチベット語訳には見られないが、欠落スペースからして、写本では前者の菩薩名についてのみこの二語が付加されていたものと思われる。

vikalpanādena ca / nirvikalpaspharaṇena ca / nirvikalpasvareṇa ca / maheśvareṇa ca /
nirvikalpamahāmaitrīsvareṇa ca / avalokiteśvareṇa (ca) bodhisattvena sārddham (/)

[2] tatra khalu bhagavā(1b³)(n anekasatasahasrayā parśadā parivṛtaḥ puraskṛto)¹⁴)
dharmaṃ deśayati sma / yad uta dharmāṇāṃ nirvikalpatām ārabhya / atha khalu bha-
gavān samantāṃ sarvāvātīm bodhisattvaparśadam avalokya bodhisattvān āmantraya-
te sma / dhārayata yūyaṃ kulaputrā avikalpapraveśāṃ nāma dhāraṇīm yāṃ avikalpa-
praveśāṃ dhāraṇīm dhārayan bodhisattvo ma(1b⁴)(hāsattvo buddhadharmān laghu-
laghu sampādayati ya)thākālaṃ¹⁵) ca viśeṣāya paraiti /

[3] atha tasyām eva parśady avikalpaprabhāso¹⁶) nāma bodhisattvo mahāsattvaḥ / sa
utthāyāsanād ekāṃsam uttarāsaṅgaṃ kṛtvā dakṣiṇāṃ jānumaṇḍalaṃ pṛthivyāṃ pra-
tiṣṭhāpya yena bhagavāṃs tenāñjaliṃ praṇāmya bhagavantam etad avocat / ni-(1b⁵)
(rvikalpapraveśāṃ dhāraṇīm deśayatu bhagavan /)¹⁷) yāṃ śrutvā bodhisattvā mahāsa-
ttvā dhārayiṣyanti / vācayiṣyanti / yoniśaś ca manasikariṣyanti / parebhyas ca vista-
reṇa samprakāśayiṣyanti / evam ukte bhagavān āha / tena hi kulaputrāḥ śṛṇu sādhu
ca suṣṭhu ca manasikuru (/) bhāṣiṣye 'ham a(1b⁶)(vikalpapraveśāṃ dhāraṇīm / sādhu
bhagavann iti te bo)dhisattvā¹⁸) bhagavataḥ pratyaśrauṣuḥ /

[4] bhagavāṃs teṣāṃ etad avocat / iha kulaputrā bodhisattvo mahāsattvo 'vikalpādhi-
pateyaṃ dharmaṃ śrutvāvikalpam āśayaṃ sanniveśya sarvavikalpanimittāni pariva-
rjayati / sa tatprathamataḥ prakṛtīvikalpanimittāni pariva(1b⁷)(rjayati sarvāni / yad uta
grāhyaṃ vā grāhakaṃ vā / tatredaṃ)¹⁹) prakṛtīvikalpanimittam yat sāsrave vastuni ni-
mittam / sāsravaṃ punar vastu pañcopādānaskandhaḥ / yad uta rūpopādānaskandhaḥ /
vedanopādānaskandhaḥ / saṃjñopādānaskandhaḥ / saṃskāropādānaskandhaḥ / vijñā-
nopādānaskandhaś ca / katham punas tāni vikalpanimittā(1b⁸)(ni parivarjayati / ābhā-
sagamanayogenāmukhībhūtāny ama)nasikārataḥ²⁰) /

[5] tasya tāni kramaśo vikalpanimittāni parivarjayataḥ tadanyāni pratipakṣanirū-
paṇavikalpanimittāni samudācaranty āmukhībhavanty ābhāsakaraṇayogena (/) yad
uta dānanirūpaṇavikalpanimittam / śīlanirūpaṇavikalpanimi(2a¹)(ttam / kṣāntini-
rūpaṇavikalpanimittam / vīryanirūpaṇavikalpanimittam²¹) / dhyānanirūpaṇavikalpa-
nimittam / prajñānirūpaṇavikalpanimittam / yad uta svabhāvanirūpaṇato vā / guṇani-

14) TP2a³, TP2a¹, ... 'khor brgya stong du mas yongs su bskor te / mdun gyis bltas nas /...

15) TP2a⁵, TP2a³, ...byang chub sems dpa' myur ba myur bar sangs rgya kyi chos rnam bsgrub
cing rtag tu...

16) MS^L, avikalpapraveśo. TP2a⁶, TP2a⁴, rnam par mi rtog snang ba (avikalpaprabhāsa).

17) TP2a⁷⁻⁸, TP2a^{5-b}¹, bcom ldan 'das ... rnam par mi rtog par 'jug pa'i gzngs bshad du gsol /

18) TP2b¹, TP2a^{6-b}¹, ngas rnam par mi rtog par 'jug pa'i gzungs bshad do / bcom ldan 'das legs
so zhes gsol to / byang chub sems dpa' ...

19) TP2b³⁻⁴, TP2b², gzung ba 'am 'dzin pa 'ang rung rang bzhi la rnam par rtog pa'i mtshan ma
thams cad yongs su spong ngo / de la ...

20) TP2b⁶, TP2b⁴, snang bar 'gyur ba'i tshul gyis mngon du gyur pa dag yid la mi byed pas
yongs su spong ngo/

21) TP2b⁸, TP2b⁶, bzod pa la dpyod rnam par rtog pa'i mtshan ma dang / brtson 'grus la dpyod
rnam par rtog pa'i mtshan ma dang /

rūpaṇato vā / sāranirūpaṇato vā / sa tāny api pratipakṣanirūpaṇavikalpanimittāny amanasikārataḥ parivarjayati /

[6] tasya tāni pari(2a²)(varjayataḥ tadanyāni tattvanirūpaṇavikalpani)mittāni²²⁾ samudācaranty āmukhībhavanty ābhāsagamanayogena / yad uta śūnyatānirūpaṇavikalpanimittam / tathatānirūpaṇavikalpanimittam / bhūtaḥkoṭinirūpaṇavikalpanimittam (/ (animitta)paramārthadharmadhātunirūpaṇavikalpanimittam²³⁾ / yad uta svalakṣaṇanirūpaṇato vā / guṇanirū(pa)ṇato vā (2a³) (sāranirūpaṇato vā / sa tāny api tattvanirūpaṇa)vikalpanimittāny²⁴⁾ amanasikārataḥ parivarjayati /

[7] tasya tāny api parivarjayato 'parāṇi prāptinirūpaṇavikalpanimittāni samudācaranty āmukhībhavanty ābhāsagamanayogena / tad yathā prathamabhūmiprāptinirūpaṇavikalpanimittam / yāvad daśa(ma)bhūmiprāptinirūpaṇavika(2a⁴)(lpanimittam / anutpattikadharmakṣāntiprāptinirūpaṇavikalpanimittam²⁵⁾ / vyākaraṇaprāptinirūpaṇavikalpanimittam / buddhakṣetrapariśuddhiprāptinirūpaṇavikalpanimittam / sattvapariṣākaprāptinirūpaṇavikalpanimittam / abhiṣekaprāptinirūpaṇavikalpanimittam / yāvat sarvākārajñatāprāptinirūpaṇavikalpanimittam²⁶⁾ (2a⁵) (/ yad uta svalakṣaṇanirūpaṇato vā guṇanirūpaṇato vā²⁷⁾ sāranirūpaṇato vā / sa tāny api prāptinirūpaṇavikalpanimittāny amanasikārataḥ parivarjayati /

[8] evaṃ sa bodhisattvo mahāsattva etāni sarvākāravikalpanimittāny amanasikārataḥ parivarjayan suprayukto bhavaty avikalpena²⁸⁾ / na ca tāvad avikalpaṃ dhātum spr̥ṣati (2a⁶) (/ asti tv eṣa yoniśaḥsamādhir avikalpadhātum²⁹⁾ sparśanāyai (/) sa tasya samyakprayogasya³⁰⁾ bhāvanānvayād bahulikaraṇānvayāt samyaṃmanasikārānvayād anabhisamṣkārad anābhogato vāvikalpaṃ dhātum spr̥ṣati / krameṇa ca pariśodhayati /

[9] kena kāraṇena kulaputrā avikalpadhātur avikalpa ity ucyate / sa(2a⁷)(rvavikalpanirūpaṇasamatikrāntatām upādāya³¹⁾ / de)śanādarśanavikalpasamatikrāntatām³²⁾ upādā-

22) TP^{3a2}, TP^{2b7}, des de dag yongs su spong ba na gzhan de kho na la dpyod pa'i rnam par rtog pa'i mtshan ma rnams ...

23) animitta は MS^L に欠く。TP, TP, MS^G より補う。ただし MS^G(6a¹) では、先立つ bhūtaḥkoṭi と複合語を形成している。

24) MS^G(6a⁴⁻⁵).

25) MS^G(6b⁴⁻⁵).

26) MS^G(7a³⁻⁴), sarvajñatāprāptinirūpaṇavikalpanimittam.

27) MS^G(7a⁴⁻⁵).

28) 完全には一致しないが、アドヴァヤヴァジュラ (Advayavajra) に引用される。tathā Avikalpapraśeśadhāraṇyām “bodhisattvo mahāsattvaḥ sarvavikalpanimittāni ākāragatikāny (sic, read ābhāsa-) amanasikārath parivarjayati”. Advayavajrasaṃgraha (G. O. S. No. XL, Baroda, 1927), p. 60, 密教聖典研究会「アドヴァヤヴァジュラ著作集 (2)」『大正大学総合仏教研究所年報』13号 (1989) pp. (136)–(137). これは矢板秀臣氏担当部分。

29) MS^G(7b⁴⁻⁵).

30) MS^L, sā(!) tatya(!) samyak*prayogasyānvayād(!). MS^G(7b⁶) + tasya samyakprayogasya.

31) MS^G(8a³⁻⁴). これに先立つ一文も含めて、完全には一致しないがアドヴァヤヴァジュラに引用される。Avikalpapraśeśadhāraṇyām “kena kāraṇena kulaputra avikalpadhātur amanasikāra ity ucyate sarvavikalpanimittasamatikrāntatām upādāya”. Advayavajrasaṃgraha, op. cit., p. 61, 前掲「アドヴァヤヴァジュラ著作集 (2)」pp. (140)–(141).

ya / sarvavikalpanimittasamatikrāntatām upādāya / sarvendriyavikalpasamatikrāntatām upādāya / sarvaviṣayavikalpasamatikrāntatām upādāya / sarvaviññaptivikalpasamatikrāntatām upādāya / sarvakleśopakle(2a⁸)(*śajñeyāvaraṇanirālayatām copādāya / tenocya*)te³³) 'vikalpo dhatur avikalpa iti /

[10] katarat tad avikalpaṃ³⁴) (/ *avikalpo*) 'rūpo 'nidarśano 'pratiṣṭhito 'nābhāso 'viññaptir aniketana iti³⁵) / avikalpadhātupratiṣṭhito hi bodhisattvo mahāsattvo jñeyanirviśiṣṭena nirvikalpena jñānenākāśasamatalān sarvadharmān paśyati / (2b¹) (tatprṣṭhalabdhena jñānena māyāmaricisvapnapratibhā)sapratīśrutkāpratibimbodakacandranirmitasamān³⁶) sarvadharmān paśyati / tato mahāsukhavihāravibhutvavai-pulyatān ca pratilabhate / mahācittasamrddhivaipulyatān (ca) pratilabhate / mahāprajñājñānavai-pulyatān ca pratilabhate / mahādeśanāvihāravibhutvavai-pulyatān ca pra-(2b²)(tilabhate / sarvakālasarvākārasarvasattvārthaka)raṇapratibalaś³⁷) ca bhavati / anābhogabuddhakāryāpratiprasārabdhitaḥ /

[11] tad yathā kulaputrā ekaghanasāramayasya pāṣāṇaparvatasyādastāt mahānānā-ratnaparipūrṇanidhiḥ syād (/) bhāsurāṇām vicitrāṇām mahācintāmaṇiratnānām / yad uta rūpyaratnasya vā / suvarṇaratnasya vā / (2b³) (aśmagarbhanānāratnasya vā / atha khalv ekatyah puruṣa³⁸) āgacchen mahānidhānenārthi (/) tam mahānidhānābhijñāḥ puruṣa evaṃ vaded (/) etasya bhoḥ puruṣa ekaghana(sāra)mayasya pāṣāṇaparvatasyādastāt mahāratnanidhānam / bhāsurāṇām ratnānām paripūrṇam tasyādastāt mahācintāmaṇiratnanidhānam / sa tvaṃ tataḥ prakṛtipāṣāṇam evotkhanasva (2b⁴) (/ tad-

32) MS⁶(8a⁴⁻⁵), deśanāvidarśanāsamatikrāntatām.

33) MS⁶(8a⁶-8b¹), sarvakleśopakleśāvaraṇanirālayatām..., TP3b⁶⁻⁷, TP3b³, nyon mongs pa thams cad dang shes bya'i sgrib pa thams cad kyi gnas med pa'i phyir te /...

34) MS⁶(8b²), katarac ca tad avikalpaṃ. MS⁶ でも avikalpa は中性形で示されている。次に示される中性名詞 jñāna に結びつく所有複合語と読むべきであろうが、疑問は残る。

35) MS⁶(8b²⁻⁴), avikalpo 'rūpo 'nidarśano 'pratiṣṭho 'nābhāso 'viññaptikam(!) aniketa iti. 前注で指摘したように、疑問文の主語が中性形であったのに対して、ここでは、答えの arūpa 以下の6語が男性形形容詞で示される。同じ一文は DhDhV に現れ、DhDhV 世親訳の梵文断簡中より原文が回収されている。tad anenārūpy anidarśanam apratiṣṭham anābhāsam avijñaptikam aniketam iti nirvikalpasya jñānasya yathāsūtram lakṣaṇam abhidhyotitaṃ bhavati / (『山口益仏教学文集』下巻、春秋社1972, p. 208)。このように DhDhV では arūpin 以下の6語が無分別智にかかる形容詞として中性形で現れる。山口博士はこれを『迦葉品 (Kāśyapa-parivarta)』(Staë-Holstein ed., pp. 86-87, § 56-57)からの引用と見ているが、筆者はこれは NPD からの引用ではないかと考えている。拙稿1 (pp. 44-45) 参照。

36) MS⁶(8b⁴⁻⁵), avikalpadhātupratiṣṭhito bodhisattvo mahāsa(5)tvah jñeyani(r)viśiṣṭhena(!) ni(r)vikalpena jñātena(!) māyāpa(6)rīci(!)gandharvanagarasvapnapratibhāsabimbabadagaca(!). MS⁶ では後半部が散逸しているが、MS^L と全く異なる。無分別智と後得智が二つの文章に分離されず、しかもガンダルヴァ城という MS^L にはない言葉が現れる。TP3b^{8-4a2}, TP3b⁴⁻⁵ は MS^L に同じ。この箇所と同様の記述が前注で指摘した部分に連続して DhDhV にも現れる(拙稿1, pp. 44-45参照)。さらにこの箇所は『唯識三十頌』の安慧釈 (Trimsīkhāvijñaptibhāṣya), カマラシーラの『第三修習次第 (3rd Bhāvanākrama)』, ラトナーカラシェーンティ (Ratnākaraśānti) の Sāratamā 等にも引用される(同じく拙稿1, pp. 41-42参照)。

37) TP4a³⁻⁴, TP3b⁷, ...'thob po // dus thams cad du sems can thams cad kyi don gyi rnam pa thams cad kyang byed nus par 'gyur te /

38) TP4a⁵, TP4a¹⁻², rdo'i snying po rin po che sna tshogs kyi ... de nas gter chen po 'dod pa'i mi la la zhig ...

utkhanatas te rūpyapratibhāsam pāṣāṇam ā)bhāsam āgamiṣyati³⁹⁾ (/) tatrāpi tvayā mahānidhānasamjñā na kartavyā / tat pariññāyotkhanitavyam / tadutkhanatas te suvarṇa(pratibhāsam) pāṣāṇam ābhāsam āgamiṣyati / tatrāpi tvayā mahānidhānasamjñā na kartavyā / tad api pariññāyotkhanitavyam / tadutkhanatas te nānāratnapratibhāsam pāṣāṇa(2b⁵)(m ābhāsam āgamiṣyati / tatrāpi tvayā mahānidhā)nasamjñā na kartavyā⁴⁰⁾ / tad api pariññāyotkhanitavyam / evaṃ hi tvam bhoḥ puruṣa suprayuktas tadutkhanito 'bhisamskāram antareṇāprayatnenaiva mahācintāmaṇiratnanidhānam drakṣyasi / tasya ca mahāratnanidhānasya pratilambhāt tvam ādhyo bhaviṣyasi / mahādhano mahābhogaḥ svaparārtheṣu sama(2b⁶)(rtho bhaviṣyatīti /)

[12] (tathā hi kulaputrā iyaṃ upamā kṛ)ṭā⁴¹⁾ yāvad evāsyārthasya vijñaptaye / ekaghana-sāramayapāṣāṇaparvata (iti samkleśadvayapratyupasthitasya samskāraprakārānām etad adhivacanam / adhistān mahācintāmaṇiratnanidhānam ity avikalpadhātor etad adhivacanam /)⁴²⁾ mahācintāmaṇiratnanidhānenārthīti bodhisattvasya mahāsattvasyaitad adhivacanam / mahāratnanidhānābhijñāḥ puruṣa iti tathāgatasyārthataḥ samyak-sambuddhasyaitad adhivacanam / prakṛti(2b⁷)(pāṣāṇam iti prakṛtivilkalpanimittānām e)ṭad adhivacanam⁴³⁾ / utkhananam iti amanasikārasyaitad adhivacanam (/) rūpyapratibhāsam pāṣāṇam iti pratipakṣanirūpaṇavikalpanimittānām etad adhivacanam / suvarṇapratibhāsam pāṣāṇam iti śūnyatādivikalpanimittānām etad adhivacanam / nānāratnapratibhāsa(m) pāṣāṇa(2b⁸)(m iti prāptivilkalpanimittānām etad adhivaca)nam⁴⁴⁾ / mahācintāmaṇiratnanidhānasya pratilambha ity avikalpadhātusparśanāyā etad adhivacanam (/) iti hi kulaputrāḥ anenopamopanyāsenāvikalpapraśeṣo⁴⁵⁾ 'nugantavyaḥ /

[13] katham punaḥ kulaputrā bodhisattvo mahāsattva etāni yathānirdiṣṭāni vikalpanimittāni vyupaparī(3a¹)(kṣamāṇo 'vikalpadhātum praviṣati / iha kula)putrā⁴⁶⁾ avikalpadhātupratīṣṭhito bodhisattvaḥ mahāsattvaḥ rūpaprakṛtivilkalpanimitta āmukhībhūta evaṃ vyupaparīkṣate / yo mama rūpam iti carati vikalpe carati / pareṣāṃ rūpam iti carati vikalpe carati / rūpam idam iti carati vikalpe carati / rūpam utpa(3a²)(dyate / nirudhyate / samkliṣyate / vyavadāyata iti cara)ti⁴⁷⁾ vikalpe carati / nāsti rūpam iti carati vi-

39) TP4a⁷, TD4a³, de brkos pa dang dngul du snang ba'i rdo khyod la snang bar 'gyur ro /

40) TP4b¹, TD4a⁴⁻⁵, ...snang bar 'gyur te // de la yang khyod kyis gter chen por 'du shes mi bya'i /

41) TP4b³, TD4a⁶, ... yong par gyur ro zhes smras pa ltar rigs kyi bu dag ji tsam du ... dper byas pa ste /

42) この部分は写本に欠落し、しかも欠落を示す空白が見られる。TP4b³⁻⁴, TD4a⁶⁻⁷, ... zhes bya ba de ni 'du byed kyi rnam pa kun nas nyon mongs pa dang // gnyis la so sor nye bar gnas pa'i tshig bla dags so // 'og na yid bzhin gyi nor bu rin po che'i gter chen po zhes bya ba de ni rnam par mi rtog pa'i dbyings kyi tshig bla dags so /

43) TP4b⁶, TD4b¹⁻², brag ces bya ba de ni rang bzhin la rnam par rtog pa'i mtshan ma rnams kyi tshig bla dags so / 最初の prakṛti は T には見られない。

44) MS^G(12a¹⁻²).

45) TP5a¹, TD4b⁴, rnam par mi rtog pa'i dbyings su 'jug po (avikalpadhātupraśeṣa). MS^G は MS^L に同じ。

46) MS^G(12b¹), -kṣamāṇo 'vikalpadhātum praviṣati / evaṃ avikalpa-, TP5a², TD4b⁵, ... rnam par mi rtog pa'i dbyings su 'jug ce na / rigs kyi bu dag 'di la ...

47) MS^G(12b⁵⁻⁶).

[14] iha kulaputrāḥ bodhisattvo mahāsattvaḥ sarvākārajñatānirūpaṇavikalpanimitta
 āmukhībhūta evaṃ vyupaparīkṣate / yo mama sarvākārajñateti carati vikalpe carati /
 pareṣāṃ sarvākārajñateti carati sa vikalpe (3a⁷) (*carati / sarvākārajñateyam iti carati*
vikalpe ca)rati⁵²⁾ / sarvākārajñatā prāpyata iti carati vikalpe carati / sarvākārajñatā sa-
 rvakleśājñeyāvaraṇaprahāṇāyeti carati vikalpe carati / (⁵³...sarvākārajñatāyā nānyat
 traidhātukaṃ vyavadānād iti carati vikalpe carati / sarvākārajñatotpadyate / ni-
 rudhyate / saṃkliśyate / vya(3a⁸)(vadāyata iti carati vikalpe carati / nāsti sarvā)kārajña-
 teti carati vikalpe carati--⁵³⁾ / svabhāvato 'pi nāsti / hetuto 'pi nāsti / phalato 'pi nāsti /
 karmato 'pi nāsti / yogato 'pi nāsti / vṛttito 'pi nāsti sarvākārajñateti carati vikalpe ca-
 rati / vijñāptimātrā sarvākārajñateti carati vikalpe carati / yathā (3b¹) (sarvākārajñatā
 nāsti tathā sarvākārajñatāpratibhā)sā⁵⁴⁾ vijñāptir api nāstīti carati vikalpe carati /

54) TP6a³⁻⁴, TP5b⁵, ji ltar na rnam pa thams cad mkhyen pa nyid med pa de bzhin du rnam pa thams cad mkhyen pa nyid du snang ba'i ...

yataś ca bodhisattvo mahāsattvo yathaiva sarvākārajñātān nopalabhate / tathaiva tatpratibhāsām api vijñaptin nopalabhate / na ca sarveṇa sarvaṃ tadvijñaptim vipraṇāśayati / na cānyatra tadvijñapter anyam kañcid dharmam upalabhate / abhā-(3b²)(vataś ca tāṃ vijñaptim na samanupaśyati / na cānyatra vijñā)pter⁵⁵) abhāvaṃ samanupaśyati / na ca tasyā vijñapter abhāva(m) tayā vijñaptiā ekatvena samanupaśyati / na prthaktvena samanupaśyati / na ca tasyā vijñapter abhāvaṃ bhāvataḥ samanupaśyati / nābhāvataḥ samanupaśyati / ebhiḥ kulaputrāḥ sarvākārāḥ sarvavikalpair yo na vika(3b³)(lpayaty ayam avikalpadharmadhātur iti na samanupaśyati /)⁵⁶

evam ayam praśeśanayo 'vikalpasya dhātoḥ / evaṃ hi kulaputrā bodhisattvo mahāsattvo 'vikalpadhātupratīṣṭhito bhavati /

[15]⁵⁷) (asya kulaputrā dharmaparyāyasya udgrahaṇalekhanavācanād bahutaraṃ puṇyaṃ nanv eva gaṅgānadīvalukopamātmabhāvaparityāgasya nanv eva gaṅgānadīvalukopamalokadhātuparipūrṇaratnadānasya nanv eva gaṅgānadīvalukopamalokadhātuparipūrṇatathāgatabimbakārāṇapūṇyaskandhasyeti /)

[16] atha khalu bhagavāṃs tasyāṃ velāyāṃ ime gāthe abhāṣata //⁵⁸

avikalpāśayo⁵⁹) bhūtvā saddharme 'smin jinātmajaḥ /

vikalpadurgam⁶⁰) vyatītya (3b⁴) (kramān niṣkalpam āpnute // 1//)

(praśāntam acalam śreṣṭham vaśa)vartisaṃśam /

avikalpasukham tasmād bodhisattvo 'dhigacchati // 2 //

[17] idam avocad bhagavān āttamanā avikalpaprabhāśaś ca bodhisattvo mahāsattvaḥ sā ca sarvāvatī parśat sadevamānuṣāsurasuragandharvaś ca loko bhagavato bhāṣitam abhyanandann iti //

3. 和 訳

[1] 語り出し⁶¹) 次のように私は聞いた。ある時世尊は、ラージャグリハ（王舎城）の、三界に属するすべてを超越した無分別法界（nirvikalpadharmadhātu）を蔵（ga-

55) T^p6a⁶, T^p5b⁶⁻⁷, rnam par rig pa de yang dngos po med par yang dag par rjes su mi mthong / rnam par rig pa ma gtogs par dngos po ...

56) T^p6a^{8-b}, T^p6a², ...gang rnam par ma brtags pa de rnam par mi rtog pa'i chos kyi dbyings so zhes kyang yang dag par rjes su mi mthong ngo /

57) 本節は MS^L に欠落。MS^G(15b⁶-16a⁴) より補う。T, Ch² には同様の文章が見られるが、Ch¹ には欠落。

58) 以下の2偈については、MS^G(16a⁶-b³) でも一部が欠落して不完全であるが、Mahāmāyā-tantrāṭīkā なる文献（筆者未見）に2偈とも引用されていることが Vrajavallabha Dvivedī 氏によって指摘され、梵文が紹介されている (Dhī, No. 3, 1987, p. 35)。MS^L の欠落部分はこの指摘から補う。

59) MS^G(16a⁶), avikalpanayo.

60) MS^G(16b¹), vikalpamārgam.

61) 本文に先立って「すべての仏陀・菩薩に帰依したてまつる。」との一文が入っていたと思われるが省略。注12参照。

rbha) とする楼閣 (prāsāda) に、おおぜいの比丘の僧団 (bhikṣusamgha) と、おおぜいの菩薩の僧団 (bodhisattvasamgha) と一緒に滞在しておられた。すなわち無分別 (Avikalpa) 菩薩摩訶薩、無分別光 (Avikalpaprabhāsa) 菩薩摩訶薩、無分別月 (Avikalpacandra) 菩薩摩訶薩、無分別勇 (Avikalpavīra)〔菩薩摩訶薩〕、無分別説法善巧 (Nirvikalpadharmanirdeśakuśala)〔菩薩摩訶薩〕、無分別自性 (Nirvikalpasvabhāva)〔菩薩摩訶薩〕、無分別慧 (Nirvikalpamati)〔菩薩摩訶薩〕、無分別吼 (Nirvikalpanāda)〔菩薩摩訶薩〕、無分別遍 (Nirvikalpaspharaṇa)〔菩薩摩訶薩〕、無分別声 (Nirvikalpasvara)〔菩薩摩訶薩〕、大自在 (Maheśvara)〔菩薩摩訶薩〕、無分別大慈声 (Nirvikalpamahāmaitrīsvara)〔菩薩摩訶薩〕、観自在菩薩 (Avalokiteśvara)〔摩訶薩〕と一緒に〔滞在して〕おられた。

〔2〕経典の名称 さてそこで世尊は、百・千の集会の者たちに取り囲まれ、尊敬を集めて、もろもろの存在 (法) が無分別であること (dharmāṇām nirvikalpatā)⁶²⁾ にかんして教え (法) を説かれた。そこで世尊は、まわりの菩薩の僧団すべてを見渡して、菩薩たちに語りかけた。「善男子たちよ、あなた方は『入無分別 (Avikalpapraveśa)』と名づける陀羅尼 (dhāraṇī) を保持すべきです。『入無分別陀羅尼』を保持する菩薩摩訶薩は、速やかに仏陀の徳性 (法) を成就し、時宜を得て (yathākālam)⁶³⁾ 卓越したもの (viśeṣa) に到達するでしょう。」

〔3〕無分別光菩薩の登場 さてその同じ集会の中に、無分別光 (Avikalpaprabhāsa)⁶⁴⁾ という名の菩薩摩訶薩がいた。彼は座より起ち、一方の肩に上衣をかけて右膝を地面につけ、世尊に向かって合掌して、次のように世尊に申し上げた。「世尊よ、『入無分別陀羅尼』を説いて下さい。菩薩摩訶薩たちはそれを聞いて、保持するでしょう。暗唱するでしょう。如理に心に描くでしょう。そして他の人々に詳しく説明するでしょう。」このように言われると、世尊は仰った。「それでは聞きなさい、善男子たちよ。

62) T^p2a³, T^p2a² では「大乘においては、もろもろの存在が、云々」と訳されている。しかし「大乘においては」の語は MS^L にも Ch² にも見られない。但し Ch¹ には対応する語が含まれる。「其所演説謂以大乘無分別法而為發起 (805b¹⁷⁻¹⁸)。』

63) (ya)thākālam に対するチベット語訳は rtag tu (常に) であるので、原語が異なっていたと思われる。注15参照。

64) この菩薩名は MS^L に Avikalpapraveśa とあるものをテキストで訂正したものである。T, Ch¹, Ch² いずれもこの名称を支持する。第17節に同じ菩薩が再登場するが、そこでは MS^L も Avikalpaprabhāsa である。ただしそれに対応する MS^G(16b⁴) では Vimalaprabhāsa という全く異なる菩薩名が示される。このような点からも MS^G が異なる recension の写本であることが伺われる。

善く、正しく心に描きなさい。『入無分別陀羅尼』を私は説いてあげよう。」それらの菩薩たちは世尊に答えた。「世尊よ、どうぞそのように。」

〔4〕五蘊の排除⁶⁵⁾ 世尊は彼等に次のように語られた。「善男子たちよ、ここで菩薩摩訶薩は無分別を主題とする教え（法）を聞いて、無分別に意志（āśaya）をとどめて、分別の原因（vikalpanimitta）すべてを排除するのです（parivarjayati）。まずその最初にその人は、所取（grāhya）あるいは能取（grāhaka）である、第一義的な（prakṛti）分別の原因すべてを排除します。この場合、第一義的な分別の原因とは、有漏の事（va-stu）の原因となるものです。有漏の事とは五取蘊です。即ち、色取蘊、受取蘊、想取蘊、行取蘊、識取蘊です。ではどのように分別の原因を排除するのであろうか。顕現する（ābhāsagamana）という仕方で見前している〔分別の原因〕を心に描かないこと（不作意、amanasikāra）からです。」⁶⁶⁾

〔5〕六波羅蜜の排除 「彼が、それら分別の原因を順々に排除する時、それ以外の、〔五取蘊の〕対治〔となる六波羅蜜〕の観察に対する分別の原因（pratipakṣanirūpaṇavikalpanimitta）が顕現するという仕方で見前するのです。即ち、布施の観察に対する分別の原因、戒の観察に対する分別の原因、忍の観察に対する分別の原因、精進の観察に対する分別の原因、禪定の観察に対する分別の原因、智慧の観察に対する分別の原因が〔見前するのです。〕即ち〔それらは〕自性の観察（svabhāvanirūpaṇa）という点から、属性の観察（guṇanirūpaṇa）という点から、核の観察（sāranirūpaṇa）という点から〔見前するのです。〕彼は、それら対治の観察に対する分別の原因をも、心に描かないことから排除するのです。」

65) この節から第7節までの4節に対しては *DhDhV* が言及している可能性が高い。caturbhir ākārair nimittaparivarjanapraveśo vipakṣapratipakṣatathatādhigamadharmanimittaparivarjanato 'nugantavyaḥ / 「原因の排除への悟入は、4つの方法で、つまり、対治されるもの、対治するもの、真如、獲得法なる原因の排除より理解すべきである。」（『山口益弘教学文集』下巻、春秋社、1972、p. 208、翻訳については同書 pp. 184-189）。これは *DhDhV* 世親釈の梵文断簡より回収された文章であるが、vipakṣa（対治されるもの）が第4節、pratipakṣa（対治するもの）が第5節、tathatā（真如）が第6節、adhigamadharma（獲得法）が第7節に対応すると思われる。これは本経第10節に見られる無分別智と後得智にかんする所説と *DhDhV* との関連（注35参照）を併せて、*NPD* と *DhDhV* との前後関係、即ち *DhDhV* の成立は、従来考えられていた時代よりはるかに下るのではないか、従って *DhDhV* が、無著（アサンガ）の信仰上の存在であった弥勒菩薩から無著自身へ、無著から弟の世親へという伝承の中で生み出された論典とは見なせないのではないかという疑問を筆者は強く感じる。

66) 直接の引用ではないが、この節に言及していると見なされる文献にカマラシーラの『第一修習次第（*1st Bhāvanākrama*）』がある。yat punar uktam *Avikalpa-praveśadhāraṇyām* "amanasikārato rūpādinimittam varjayati" iti, G. Tucci, *Minor Buddhist Texts*, Part II (Rome, 1958), p. 212.

〔6〕 眞実の排除 「彼が、それら分別の原因を排除する時、それ以外の、眞実 (tattva) の觀察に対する分別の原因が顯現するという仕方であ現し、現前するのです。即ち、空性 (sūnyatā) の觀察に対する分別の原因、眞如 (tathatā) の觀察に対する分別の原因、實際 (bhūtakoti) の觀察に対する分別の原因、無相 (animitta) と勝義 (paramārtha) と法界 (dharmadhātu) の觀察に対する分別の原因が〔現前するのです。〕即ち〔それらは〕自相の觀察 (svalakṣaṇanirūpaṇa) という点から、属性の觀察という点から、核の觀察という点から〔現前するのです。〕彼は、それらの眞実の觀察に対する分別の原因をも、心に描かないことから排除するのです。」

〔7〕 獲得の排除 「彼が、それらを排除したとしても、それとは別の、獲得 (prāpti) の觀察に対する分別の原因が顯現するという仕方であ現し、現前するのです。即ち、初地 (prathamabhūmi) の獲得の觀察に対する分別の原因、ないし第十地 (daśamabhūmi) の獲得の觀察に対する分別の原因、無生法忍 (anutpattikadharmakṣānti) の獲得の觀察に対する分別の原因、授記 (vyākaraṇa) の獲得の觀察に対する分別の原因、仏国土清淨 (buddhakṣetrapariśuddhi) の獲得の觀察に対する分別の原因、衆生成熟 (sattvapariṇāma) の獲得の觀察に対する分別の原因、灌頂 (abhiṣeka) の獲得の觀察に対する分別の原因、ないし一切種智性 (sarvākārajñatā) の獲得の觀察に対する分別の原因が〔現前するのです。〕即ち〔それらは〕自相の觀察という点から、属性の觀察という点から、核の觀察という点から〔現前するのです。〕彼は、それらの獲得の觀察に対する分別の原因をも、心に描かないことから排除するのです。」

〔8〕 無分別界に触れる 「以上のようにして、その菩薩摩訶薩は、それらの、あらゆる種類の分別の原因を心に描かないことから排除しつつ、無分別をよく勤修したものの (suprayukta) となるのです。しかし、それだけでは無分別界 (avikalpo dhātuḥ) に触れたことにはなりません。無分別界に触れるための如理三昧 (yonisāḥ samādhi) があるのです。その〔ための〕正しい加行 (samyakprayoga) は、修習 (bhāvanā) が伴い、多く為すこと (bahulikaraṇa) が伴い、正しく心に描くことが伴うが故に、〔心に〕概念化すること (abhisamkāra) も、努力すること (ābhoga) もなく、その人は無分別界に触れるのです⁶⁷⁾。そして順々に淨化してゆくのです。」

67) この一文の前半部が、ラトナーカラシャーンティの *Madhyamakālaṃkāropadeśa* に引用されていることが海野孝憲「*Madhyamakālaṃkāropadeśa* の和訳解説」『名城大学人文紀要』↗

〔9〕無分別界は分別なきもの 「善男子たちよ、どうして無分別界は分別なきものと言われるのかというと、すべての分別の観察 (vikalpanirūpaṇa) を超越しているからです。説くこと (deśanā) 見せること (darśana) の分別を超越しているからです。すべての分別の原因 (vikalpanimitta) を超越しているからです。すべての感官 (根) の分別を超越しているからです。すべての対象 (viśaya) の分別を超越しているからです。すべての表象 (vijñapti) の分別を超越しているからです。すべての、煩悩・随煩悩なる〔障害〕と認識対象 (jñeya) に対する障害に無執着 (nirālaya) であるからです。それ故に、無分別界は分別なきものと言われるのです。」

〔10〕無分別智と後得智⁶⁸⁾ 「その無分別とは如何なるものかという、《無分別は形をもたず (arūpa), 見えることなく (anidarśana), 住することなく (apratīṣṭhita), 顕現することなく (anābhāsa), 表象をもたず (avijñapti), 基底なきもの (aniketana) である》と〔言われています。〕無分別界に住する菩薩摩訶薩は、認識対象と無区分なる (jñeyanirviśiṣṭa) 無分別智によって、一切の存在を虚空 (ākāśa) の表面 (tala) に等しいものと見るのです。その後で得られる智 (後得智) によって、すべての存在を幻 (māyā), 陽炎 (marīci), 夢 (svapna), 影 (pratibhāsa), こだま (pratiśrutkā), 鏡像 (pratibimba), 水月 (udakacandra), 変化 (nirmita) に等しいものと見るのです。それから、大いなる安樂 (mahāsukha) に住することに自在であること (vibhūta) の広大性 (vaidulyatā) を獲得し、大いなる心の繁榮 (cittasamṛddhi) の広大性を獲得し、大いなる慧 (prajñā) と智 (jñāna) の広大性を獲得し、大いなる教え (mahādeśanā) に住することに自在であることの広大性を獲得し、すべての時間にわたって、衆生に対するあらゆる種類の利益を為す (arthakaraṇa) に適したもの (pratibala) となるのです。〔なぜ広大なのかといえば〕努力することなき (anābhoga) 仏陀の所作 (buddhakārya) は止むことがない (apratiprasādbhi) からなのです。」

〔11〕鉤山の比喻 「例えば、善男子たちよ、堅い岩盤でできた (ekaghaṇasārama-ya) 岩山 (pāṣāṇaparvata) の内部に、種々の宝石に満ちた大鉤脈 (nidhi) があるとしよう。即ち、銀宝 (rūpyaratna), 金宝 (suvarṇaratna), 瑪瑙の種々の宝 (aśmagarbhānā-

32集 (20巻1号, 1984), p. 3 より知られるが、海野氏は *NPD* の経名を経名として正しく読んでいない。なお、海野氏は同じタイトルの和訳研究を同紀要に複数発表しているので読者は混乱をきたすが、これは、その1である。なぜ発表順に番号を付けないのか筆者には理解不能。

68) この一節は *DhDhV* との関係で種々の問題ををはらむ。注35, 65参照。

ratna) といった、輝く (bhāsurā), 様々の〔宝で満ちた〕大いなる如意宝珠 (mahā-cintāmaṇiratna)〔の大鉱脈があるとしよう。〕さて、ひとりの男が大鉱脈を求めてやって来るとしよう。〔そこで〕大鉱脈について知識がある〔別の〕男が彼にこのように言うとしよう。『おお君、この堅い岩盤でできた岩山の内部に宝の大鉱脈があるぞ。この内部には、輝く宝の満ちた大いなる如意宝珠の鉱脈があるぞ。ここから君は、最初の岩 (prakṛtipāṣāṇa) を掘り進んだらいい。君が掘り進むと、銀の姿をした (rūpya-pratibhāsa) 岩 (pāṣāṇa) が現れるだろう。しかしそれで大鉱脈に対する君の思い (saṃ-jñā) を終わらせるべきではない。それを分かれば、〔さらに〕掘り進むべきだ。君が掘り進むと、金の姿をした岩が現れるだろう。しかしそれで大鉱脈に対する君の思いを終わらせるべきではない。それを分かれば、〔さらに〕掘り進むべきだ。君が掘り進むと、〔瑪瑙の〕種々の宝 (nānāratna) の姿をした岩が現われるだろう。しかしそれで大鉱脈に対する君の思いを終わらせるべきではない。それを分かれば、〔さらに〕掘り進むべきだ。おお君、このようにそれを掘り返し、よく励めば (suprayukta), 〔最後には〕概念化 (abhisamṣkāra) なく、努力 (prayatna) なくして、大いなる如意宝珠の鉱脈を発見するだろう。そして、その宝の大鉱脈を獲得して、君は金持ち (āḍhya) になるだろう。大資産家 (mahādhana), 大富豪 (mahābhoga), 自と他の利益をかなえる人 (samartha) になるだろう。』と。」

[12] この比喩が象徴するもの 「実に、善男子たちよ、どれだけの意味を知らせるために、この比喩が作られたのであろうか。《堅い岩盤でできた岩山》とは、雑染と二つのものに止まる人にとっての⁶⁹⁾ 種々なる諸行に対する例え (増語, adhivacana) なのです。《内部に宝の大鉱脈》とは、無分別界の例えなのです。《如意宝珠の鉱脈を求める人》とは、菩薩摩訶薩の例えなのです。《大鉱脈について知識がある〔別の〕男》とは、如来にして阿羅漢にして正等覚である者の例えなのです。《最初の岩》とは、第一義的な分別の原因 (prakṛtivilkalpanimitta) の例えなのです。《掘り進むこと》とは、心に描かないこと (amanasikāra) の例えなのです。《銀の姿をした岩》とは、〔五蘊の〕対治〔である六波羅蜜〕の観察に対する分別の原因の例えなのです。《金の姿をした岩》とは、空性等の分別の原因の例えなのです。《種々の宝の姿をした岩》とは、〔十地等を〕獲得することに対する分別の原因の例えなのです。《大いなる如意宝

69) *KT^P(168b⁸ ff.)*, *KT^P(141a³ff)* によると、「雑染」とは、無始時来なじんだ煩惱と業と生を相とする雑染を包括した「雑染」であり、「二つのもの」とは、断と常の辺等に執着することであるという。

珠の鉉脈の獲得》とは、無分別界に触れることの例えなのです。以上のように、善男子たちよ、この比喩の説示するところをもって無分別〔界〕に入ることを理解すべきです。」

[13] 無分別界に入る（その1） 「では善男子たちよ、菩薩摩訶薩は、説かれた通りのこれらの分別の原因を観察しつつ、どのようにして無分別界に入るのでしょうか。ここで善男子たちよ、無分別界に住する菩薩摩訶薩は、色（rūpa）という第一義的な分別の原因が現前する時、このように観察するのです。『私の色である。』と行じている（carat）時、分別を行ずることになるのだ（carati）。『他人の色である。』と行じている時、分別を行ずることになるのだ。『これは色である。』と行じている時、分別を行ずることになるのだ。『色は生じ、滅し、雑染され、浄化される。』と行じている時、分別を行ずることになるのだ。『色は存在しない。』と行じている時、分別を行ずることになるのだ。『色は自性（svabhāva）という点で存在しない。因（hetu）という点で存在しない。果（phala）という点で存在しない。業（karman）という点で存在しない。相応（yoga）という点で存在しない。起（vṛtti）という点で存在しない。』⁷⁰⁾と行じている時、分別を行ずることになるのだ。『色は表象にすぎない（唯識、vijñaptimātra）。』と行じている時、分別を行ずることになるのだ。『色が存在しないのと同様に、色として顕現する表象（rūpapratiḥāsā vijñaptiḥ）も存在しない。』と行じている時、分別を行ずることになるのだ。」

「だから善男子たちよ、菩薩摩訶薩は『色である。』とは認識しないのです。色として顕現する表象も認識しないのです。すべてにわたって表象を滅尽するのです。そして表象以外に、他のいかなる存在（法）をも認識しないのです。そしてその表象も、非存在（無、abhāva）という点から見ないのです。そして表象以外に、非存在をも認識しないのです。その色として顕現する表象の非存在を、その表象との同一性（ekatva）という点から見ないのです。別異性（prthaktva）という点から見ないのです。そして表象の非存在を存在（有、bhāva）という点から見ないのです。非存在という点から見ないのです。善男子たちよ、このような、いかなる形の分別をもっても分別しないものが、無分別界であるとも見ないのです。」

「善男子たちよ、以上のことが無分別界に入る方法（naya）なのです。このように

70) 自性（svabhāva）から起（vṛtti）までの6語の意味については、高崎直道「法身の一元論——如来藏思想の法観念」『仏教における法の研究』（春秋社、1975）pp. 221-240、特に p. 231以下参照。

して、菩薩摩訶薩は無分別界に住するものとなったのです。同様に受、想、行、識についても、同様に布施波羅蜜、戒波羅蜜、忍波羅蜜、精進波羅蜜、禪定波羅蜜、智慧波羅蜜についても、同様に空性等、ないしは一切種智性についても当てはめるべきなのです。」

[14] 無分別界に入る（その2） 「ここで善男子たちよ、菩薩摩訶薩は、一切種智性の観察に対する分別の原因が現前する時、このように観察するのです。『私の一切種智性である。』と行じている時、分別を行ずることになるのだ。『他人の一切種智性である。』と行じている時、その人は分別を行ずることになるのだ。『これは一切種智性である。』と行じている時、分別を行ずることになるのだ。『一切種智性が獲得される。』と行じている時、分別を行ずることになるのだ。『一切種智性は一切の煩惱〔という障害〕と認識対象に対する障害を断じるためである。』と行じている時、分別を行ずることになるのだ。『一切種智性が清浄である以外に、三界に属する〔清浄は〕ない。』と行じている時、分別を行ずることになるのだ。『一切種智性は生じ、滅し、雑染され、浄化される。』と行じている時、分別を行ずることになるのだ⁷¹⁾。『一切種智性は存在しない。』と行じている時、分別を行ずることになるのだ。『一切種智性は自性という点で存在しない。因という点で存在しない。果という点で存在しない。業という点で存在しない。相応という点で存在しない。起という点で存在しない。』と行じている時、分別を行ずることになるのだ。『一切種智性は表象にすぎない（唯識）。』と行じている時、分別を行ずることになるのだ。『一切種智性が存在しないのと同様に、一切種智性として顕現する表象も存在しない。』と行じている時、分別を行ずることになるのだ。」

「だから善男子たちよ、菩薩摩訶薩は、一切種智性を認識しないのです。同様にそれとして顕現する表象も認識しないのです。すべてにわたってその表象を滅尽するのです。その表象以外に、他のいかなる存在（法）をも認識しないのです。そしてその表象も、非存在（無、abhāva）という点から見ないのです。そして表象以外に、非存在をも認識しないのです。その表象の非存在を、その表象との同一性（ekatva）という点から見ないのです。別異性（prthaktva）という点から見ないのです。そして表象の非存在を存在（有、bhāva）という点から見ないのです。非存在という点から見ないのです。善男子たちよ、このような、いかなる形の分別をもっても分別しない

71) T には『一切種智性は浄化される。』と行じている時、分別を行ずることになるのだ。」との一文のみあって、テキストと異なる。注53参照。

ものが、無分別法界 (avikalpadharmadhātu) であるとも見ないのです。」

「以上のように、これが無分別界に入る方法なのです。このようにして、善男子たちよ、菩薩摩訶薩は無分別界に住するものとなったのです。」

[15] この経典の功德 「善男子たちよ、この法門 (dharmaparyāya) を受持 (udgrahaṇa) し、書写 (lekhana) し、暗唱 (vācana) することによる功德は、ガンジス河の砂の数に等しい身体を布施する〔功德〕よりも、ガンジス河の砂の数に等しい世界を宝の布施で満たす〔功德〕よりも、ガンジス河の砂の数に等しい世界を仏像 (buddha-bimba) を作らせる功德の集まりで満たす〔功德〕よりも多いのです。」

[16] まとめの詩頌 さてその時、世尊は次のような詩頌を説かれた。

無分別への意志もてる (avikalpāśaya) 勝利者の子 (菩薩, jinātmaja) は、この正法 (saddharma) に生まれて、分別の悪路 (vikalpadurga) を超越し、順々に (kramāt) 無分別を獲得する。〔第1偈〕⁷²⁾

それ故、寂靜 (praśānta) であり、不動 (acala) であり、最勝 (śreṣṭha) であり、自在であり (vaśavartin), 等不等 (samāsama) なる⁷³⁾、無分別の安樂 (avikalpa-sukha) を菩薩は証得する。〔第2偈〕

[17] むすび このように世尊が説かれると、心満たされた (āttamanas) 無分別光菩薩と、その集会のものたちすべてと、神々、人間、アスラを含む、すべての世間のものたちは、世尊の説かれたことに歓喜した。

〔附〕資料編

資料編として、以下に *NPD* の旧レニングラード写本とギルギット写本のローマ字転写を示しておきたい。転写にあたって次のような記号を用いた。

[] 破損しているが解読可能な文字； .. 破損により解読不能な文字； () 筆者により任意に補われた文字； { } 一度書かれた後、書写生自身によって消去された、あるいは

72) この第1偈はアティージャの *Bodhipathapradīpa* に引用される。H. Eimer, *Bodhipathapradīpa; Ein Leergedicht des Atiśa (Dīpaṃkaraśrījñāna) in der Tibetischen Überlieferung* (Wiesbaden 1978), pp. 134–135. Losang Norbu Shastri, *Bodhipathapradīpaḥ of Ācārya Dīpaṃkaraśrījñāna (Bibliotheca Indo-Tibetica, VII)*, (Varanasi, 1984), p. 58.

73) *KT^P*(174a²⁻³), *KT^D*(145a¹) によると、仏と一切の菩薩に共通しているから「等」であり、声聞等とは共通していないから「不等」であるという。

は誤写された、あるいは正規の梵語としては不要な文字； + 失われた文字； /// 写本の破れ目； ・ / // daṇḍa; (!) sic.; * virāma.

MS^L Transcribed:

1b

1 /// [-ma]ye bhagavān rājagṛhe virahati sma / sarvatraidhātukaprativiśiṣṭanirvikalpa-dharmadhātugarbhe prāsāde mahatā bhikṣusamṅghena sārddham mahatā ca bodhisatvasamṅghena / tad yathā avi(ka)lpena ca bodhisatvena mahāsatvena / avikalpaprabhāsena ca bodhisatvena mahāsatvena / avikalpaca-

2 /// [-ṇa] ca / nirvikalpadharmanirdeśakuśalena ca / nirvikalpasvabhāvena ca / nirvikalpmatīnā ca / nirvikalpanādena ca / nirvikalpaspharaṇena ca / nirvikalpasvareṇa ca / maheśvareṇa ca / nirvikalpamahāmaitrīsvareṇa ca / avalokiteśvareṇa bodhisatvena sārddhan (/) tatra khalu bhagavā-

3 /// dharmam deśayati sma / yad uta dharmāṇām nirvikalpatām ārabhya / atha khalu bhagavān* samantān sarvāvatīm bodhisatvapaṇṣadam avalokya bodhisatvān āmantrayate sma / dhārayata yūyam kulaputrā avikalpapraveśān nāma dhāraṇīm yām avikalpapraveśān dhāraṇīn dhārayan bodhisatvo ma-

4 /// -thākālam ca viśeṣāya paraiti / atha tasyām eva paṇṣadi avikalpapraveśo(!) nāma bodhisatvo mahāsatvaḥ / sa utthāyāsanād ekāmsam uttarāsaṅgam kṛtvā dakṣiṇāṁ jānumaṇḍalam pṛthivyām pratiṣṭhāpya yena bhagavāms tenāñjalīm praṇamya bhagavantaṁ etad avocat* / ni-

5 /// yām śrutvā bodhisatvā mahāsatvā dhārayiṣyanti / vācayiṣyanti / yoniśaś ca manasikariṣyanti / parebhyaś ca vistareṇa samprakāśayiṣyanti / evam ukte bhagavān āha / tena hi kulaputra(!) śṛṇu sādhu ca suṣṭhu ca manasikuru (/) bhāṣiṣye {/} ahann a-

6 /// -dhisatvā bhagavataḥ pratyāśrauṣuḥ / bhagavāms teṣāṁ etad avocat* / iha kulaputra(!) bodhisatvo mahāsatvo avikalpādhipateyam dharmam śrutvā avikalpam āśāyam sanniveśya sarvavikalpanimittāni parivarjayati / sa tat*-prathamataḥ prakṛtivilkalpanimittāni pariva-

7 /// prakṛtivilkalpanimittam yat sāsrave vastuni nimittam / sāsravam punar vastu pañcopādānaskandhaḥ / yad uta rūpopādānaskandhaḥ / vedanopādānaskandhaḥ / samjñopādānaskandhaḥ / saṃskāropādānaskandhaḥ / vijñānopādānaskandhaś ca / katham punas tāni vikalpanimittā-

8 /// -nasikārataḥ / tasya tāni kramaśo vikalpanimittāni parivarjayataḥ {/} tadanyāni pratipakṣanirūpaṇavikalpanimittāni samudācaranty āmukhībhavanti {/} ābhāsakaraṇayogena (/) yad uta dānanirūpaṇavikalpanimittam / śīlanirūpaṇavikalpanimi-

2a

1 /// -paṇavikalpanimittam / dhyānanirūpaṇavikalpanimittam / prajñānirūpaṇavikalpa-

nimittam / yad uta svabhāvanirūpaṇato vā / guṇanirūpaṇato vā / sāranirūpaṇato vā / sa tāny api pratipakṣanirūpaṇavikalpanimittāni {} amanasikārataḥ parivarjayati / tasya tāni pari-

2 /// -mittāni samudācaranty āmukhībhavanty ābhāsagamanayogena / yad uta śūnyatā-nirūpaṇavikalpanimittam / tathatānirūpaṇavikalpanimittam / bhūtakotīnirūpaṇavikalpanimittam (/) paramārthadharmaḍhātunirūpaṇavikalpanimittam / yad uta svalakṣaṇanirūpaṇato vā / guṇanirū(pa)ṇato vā

3 /// [-vi]kalpanimittāni {} amanasikārataḥ parivarjayati / tasya tāny api parivarjayato aparāṇi prāptinirūpaṇavikalpanimittāni samudācaranty āmukhībhavanty ābhāsagamanayogena / tad yathā prathamabhūmiprāptinirūpaṇavikalpanimittam / yāvad daśa-(ma)bhūmiprāptinirūpaṇavika-

4 /// -paṇavikalpanimittam / vyākaraṇaprāptinirūpaṇavikalpanimittam / buddhakṣetra-pariśuddhiprāptinirūpaṇavikalpanimittam / satvapariṇākaprāptinirūpaṇavikalpanimittam / abhiṣekaprāptinirūpaṇavikalpanimittam / yāvat sarvākārajñātāprāptinirūpaṇavikalpanimittam

5 /// [-ā] sāranirūpaṇato vā / sa tāny api prāptinirūpaṇavikalpanimittāny amanasikārataḥ parivarjayati / evaṃ sa bodhisatvo mahāsatvaḥ {} etāni sarvākāravikalpanimittāny amanasikārataḥ parivarjayan* suprayukto bhavaty avikalpena / na ca tāvad avikalpan dhātum sprṣati

6 /// [spa]rśanāyai sā(!) tatya(!) samyak*prayogasyānvayād(!) bhāvanānvayād bahuḷikarānānvayāt* {} samyanmanasikārānvayād anabhisamṣkārad anābhogato vā avikalpaṃ dhātum sprṣati / krameṇa ca pariśodhayati / kena kāraṇena kulaputrā avikalpadhātur avikalpa ity ucyate / sa-

7 /// -śanādarśanavikalpasamatikrāntatām upādāya / sarvavikalpanimittasamatikrāntatām upādāya / sarvendriyavikalpasamatikrāntatām upādāya / sarvaviśayavikalpasamatikrāntatām upādāya / sarvaviññaptivikalpasamatikrāntatām upādāya / sarvakleśopakle-

8 /// -te avikalpo dhatur avikalpa iti / katarat tad avikalpaṃ (/ avikalpo) 'rūpo 'nidarśano 'pratiṣṭhito 'nābhāso 'vijñāptyaniketana(!) iti / avikalpadhātupratiṣṭhito hi bodhisatvo mahāsatvo jñeyanirviśiṣṭena nirvikalpena jñānenākāśasamatalān sarvadharmān paśyati /

2b

1 /// -sapraṭiśrutkāpratibimbodakacandranirmitasamān* sarvadharmān paśyati / tato mahāsukhavihāravibhutvavaipulyatān ca pratilabhate / mahācittasamṛddhivaipulyatān pratilabhate / mahāprajñājñānavaipulyatān ca pratilabhate / mahādeśanāvihāravibhutvavaipulyatān ca pra-

2 /// -raṇapratibalaś ca bhavati / anābhogabuddhakāryāpratiprasārabdhitaḥ / tad yathā

kulaputrā ekaghanasāramayasya pāṣāṇaparvatasyādhastān mahānānāratnapari-
pūrṇanidhiḥ syād (/) bhāsurāṇām vicitrāṇām mahācintāmaṇiratnānām / yad uta
rūpyaratnasya vā / suvarṇaratnasya vā /

3 /// -ṣa āgacchen mahānidhānenārthī (/) taṃ mahānidhānābhijñāḥ puruṣa evaṃ vaded
(/) etasya bhoḥ puruṣa ekaghana(sāra)mayasya pāṣāṇaparvatasyādhastān mahāratnani-
dhānam / bhāsurāṇām ratnānām pariṇipūrṇan tasyādhastān mahācintāmaṇiratnānidhā-
nam / sa tvaṃ tataḥ prakṛtipāṣāṇam evotkhanasva

4 /// [-bhā]sam āgamiṣyati (/) tatrāpi tvayā mahānidhānasamjñā na karttavyā / tat pari-
jñāyotkhanitavyam / tadutkhanatas te suvarṇa(pratibhāsam) pāṣāṇam ābhāsam āga-
miṣyati / tatrāpi tvayā mahānidhānasamjñā na karttavyā / tad api pariñāyotkhanita-
vyam / tadutkhanatas te nānāratnapratibhāsam pāṣāṇa-

5 /// -nasamjñā na karttavyā / tad api pariñāyotkhanitavyam* / evaṃ hi tvaṃ bhoḥ
puruṣa suprayuktas tadutkhanito 'bhisamskāram antareṇāprayatnenaiva mahācintā-
maṇiratnānidhānam drakṣyasi / tasya ca mahāratnānidhānasya pratilambhāt tvaṃ
ādhyo bhaviṣyasi / mahādhano mahābhogaḥ svaparārtheṣu sama-

6 /// -tā yāvad evāsyārthasya vijñaptaye / ekaghanasāramayapāṣāṇaparvata- = la-
cuna= mahācintāmaṇiratnānidhānenārthī (/) bodhisatvasya mahāsatvasyaitad
adhivacanam / mahāratnānidhānābhijñāḥ (/) puruṣa iti tathāgatasyārthataḥ samyak-
sambuddhasyaitad adhivacanam / prakṛti-

7 /// -tad adhivacanam / utkhananam iti (/) amanasikārasyaitad adhivacanam (/) rūpya-
pratibhāsam pāṣāṇam iti pratipakṣanirūpaṇavikalpanimittānām etad adhivacanam /
suvarṇapratibhāsam pāṣāṇam iti śūnyatādivikalpanimittānām etad adhivacanam /
nānāratnapratibhāsa(m) pāṣāṇa-

8 /// [-nam] / mahācintāmaṇiratnānidhānasya pratilambha iti (/) avikalpadhātusparśa-
nāyā etad adhivacanam iti hi kulaputrāḥ (/) anenopamopanyāsenāvikalpapraveśo
'nugantavyaḥ / kathaṃ punaḥ kulaputrā bodhisatvo mahāsatva etāni yathānirdiṣṭāni
vikalpanimittāni vyupaparī-

3a

1 /// -putrā avikalpadhātupratīṣṭhito bodhisatvaḥ mahāsatvaḥ (/) rūpaprakṛtīvikalpa-
nimitte āmukhībhūte evaṃ vyupaparīkṣate / yo mama rūpam iti carati vikalpe carati /
pareṣāṃ rūpam iti {dam iti} carati vikalpe carati / rūpam idam iti carati vikalpe cara-
ti / rūpam utpa-

2 /// [-ti] vikalpe carati / nāsti rūpam iti carati vikalpe carati / svabhāvato 'pi nāsti
(/) hetuto 'pi nāsti (/) phalato 'pi nāsti / karmato 'pi nāsti / yogato 'pi nāsti / vṛttito 'pi
nāsti (/) rūpam iti carati vikalpe carati / vijñaptimātram rūpam iti carati vikalpe carati /
yathā

3 /// -stīti (/) carati vikalpe carati / yataś ca kulaputrā bodhisatvo mahāsatvo rūpam iti

nopalabhate / rūpapratibhāsām api vijñaptin nopalabhate / na ca sarveṇa sarvaṃ vijñaptiṃ vipariṇāśayati / na cānyatra vijñapter anyam kañcid dharmam upalabhate / tāñ ca vijñaptim abhāvataḥ {/}

4 /// -paśyati / tasyāś ca rūpapratibhāsāyā vijñapter abhāvaṃ tayā vijñaptyā naikatvena samanupaśyati / na prthaktvena samanupaśyati / na ca vijñaptyabhāvaṃ bhāvataḥ samanupaśyati / nābhāvataḥ samanupaśyati / ebhiḥ kulaputrāḥ sarvākārāḥ sarvavikalpair yo na vikalpayaty aya-

5 /// -trāḥ praveśanayo 'vikalpasya dhātoḥ / eva(ṃ) ca bodhisatvo mahāsatvo 'vikalpadhātupratīṣṭhito bhavati / evaṃ vedanāyāḥ saṃjñāyāḥ saṃskārāṇāṃ vijñānasya / evaṃ dānapāramitāyāḥ śīlapāramitāyāḥ {/} kṣāntipāramitāyāḥ {/} vīryapāramitāyāḥ {/} dhyāna-

6 /// -nyatādīnāṃ yāvat sarvākārajñatāyā yojyam* / iha kulaputrāḥ bodhisatvo mahāsatvaḥ {/} sarvākārajñatānirūpanavikalpe(!) nimित्ते āmukhībhūte {/} evaṃ vyupaparikṣate / yo mama sarvākārajñateti {/} carati vikalpe carati / pareṣāṃ sarvākārajñateti carati sa vikalpe

7 /// [-ra]ti / sarvākārajñatā prāpyata iti carati vikalpe carati / sarvākārajñatā sarvakleśajñeyāvaranaprahāṇāyeti carati vikalpe carati / sarvākārajñatāyā nānyat traidhātukaṃ vyavadānād iti carati vikalpe carati / sarvākārajñatotpadyate / nirudhyate / saṃkliśyate / vya-

8 /// [-kā]rajñateti carati vikalpe carati / svabhāvato 'pi nāsti / hetuto 'pi nāsti / phalato 'pi nāsti / karmato 'pi nāsti / yogato 'pi nāsti / vṛttito 'pi nāsti {/} sarvākārajñateti carati vikalpe carati / vijñaptimātram(!) sarvākārajñateti carati vikalpe carati / yathā

3b

1 /// -sā vijñaptir api nāstīti carati vikalpe carati / yataś ca bodhisatvo mahāsatvo yathaiva sarvākārajñatān nopalabhate / tathaiva tatpratibhāsām api vijñaptin nopalabhate / na ca sarveṇa sarvaṃ tadvijñaptiṃ vipariṇāśayati / na cānyatra tadvijñapter anyam kañcid dharmam upalabhate / abhā-

2 /// [-pte]r abhāvaṃ samanupaśyati / na ca tasyā vijñapter abhāva(ṃ) tayā vijñaptyā ekatvena samanupaśyati / na prthaktvena samanupaśyati / na ca tasyā vijñapter abhāvaṃ bhāvataḥ samanupaśyati / nābhāvataḥ samanupaśyati / ebhiḥ kulaputrāḥ sarvākārāḥ sarvavikalpair yo na vika-

3 /// [e]vaṃ ayam praveśanayo 'vikalpasya dhātoḥ / evaṃ hi kulaputrā bodhisatvo mahāsatvo 'vikalpadhātu {praveśa} pratīṣṭhito bhavati / =lacuna= atha khalu bhagavāṃs tasyāṃ velāyāṃ ime gāthai(!) abhāṣata // avikalpāśayo bhūtvā saddharme 'smiṇ* jñātmajāḥ / vikalpadurgam vyatītya

4 /// (vaśa)varttisamāsamam / avikalpasukham tasmāt* {/} bodhisatvo 'dhigacchati // idam avocad bhagavān āttamanā avikalpaprabhāśaś ca bodhisatvo mahāsatvaḥ {/} sā

ca sarvāvātī parṣat sadevamānuṣāsuraḡandharvaś ca loko bhagavato bhāṣitam abhy-
anandann iti // //

MS^G Transcribed:

folios 1–5 missing

[1670] (6a) -vikalpanimittam · bhūtakotyanimittaparamārtha(2)dharmadhātunirūpaṇa-
vikalpanimittam · yad uta s(v)a(3)lakṣaṇanirūpaṇato vā guṇanirūpaṇato vā · (4) sāra-
nirūpaṇato vā · sa tāny api tatvanirūpa(5)ṇavikalpanimittāny api manasikārataḥ(!) pa-
riva(6)rjayati · tasya tāny api parivarjayato 'parāṇi

[1671] (6b) prāpta(!)nirūpaṇavikalpanimittāvi(!) samudācaranty ā(2)bhāsagamana-
yogena · tad yathā prathamabhūmiprā(3)ptinirūpaṇavikalpanimittam · yāvad daśama-
bhūmi(4)prāptinirūpaṇavikalpanimittam* anutpattika(5)dharmakṣāntiprāptinirūpaṇa-
vikalpanimittam* vyākara(6)ṇaprāptinirūpaṇavikalpanimittam* buddhakṣetrapa-

[1668] (7a) -(ri)[śu]ddhi{h}prāptinirūpaṇavikalpanimittam · satvapa(2)(ri)pākaprāptini-
rūpaṇavikalpanimittam · abhiṣeka(3)(pr)[ā]ptinirūpaṇavikalpanimittam* yāvat sarva-
jña(4)tāprāptinirūpaṇavikalpanimittam* yad u(5)ta svalakṣaṇanirūpaṇato vā guṇani-
rūpaṇato vā (6) sāranirūpaṇato vā {sāranirūpaṇato vā} sa tā(7)ny api prā{pri}ptini-
rūpaṇavikalpanimittāny ama-

[1669] (7b) -nasikārataḥ⁷⁴ parivarjayati · evaṃ sa bodhisatvo (2) mahāsatvaḥ sarvākāra-
vikalpanimittāny amanasi(3)kārataḥ parivarjayan suykto bhavaty avikalpena · na (4)
ca tāvad avikalpadhātum sparśayati · asti tv eṣa (5) yonīśaḥsamādhīḥ avikalpadhā-
tum{h} sparśanāyāi{h} (6) + tasya samyakprayogasya sevanānvayād bhāvanā-
nva(7)(y)ād [b]ahulīkaraṇānvayā(t) samyaṇmanasikārānva-

[1672] (8a) -yād abhisamskārād(!) anābhogato 'vikalpadhātum sprśa(2)ti · krameṇa ca
parīśodhayati · kena kāraṇenā(3)vikalpo {ka} dhātur avikalpa ity ucyate // sarvavika-
(4)lpanirūpaṇasamatikrāntatām upādāya · deśa(5)nāvidarśanāsamatikrāntatām upā-
dāya · sarvendri(6)ya{ma}vikalpasamatikrāntatām upādāya · sarva-

[1673] (8b) -kleśopakleśāvaraṇanirālayatām copādāya · t(e)n(o)(2)cyate 'vikalpa iti · ka-
tarac ca tad avikalpaṃ · avikalpo 'rū(3)po 'nidarśano 'pratiṣṭhio 'nābhāso 'vijñaptika-
m(!) aniketa i(4)ti · avikalpadhātupratiṣṭhito bodhisatvo mahāsa(5)tvāḥ jñeya-
ni(r)viśiṣṭhena(!) ni(r)vikalpena jñātena(!) māyāpa(6)rīci(!)gandharvanagarasvapna-
pratibhāsabimbadaḡaca(!)

folios 9–11 missing

[1674] (12a) [-vaca]nam* nānāratnapra(t)[i-]/ // [t-](i) prāpti(2)vikalpanimittānām
[e]ta[d] (adhi)[va]cana(m) · mahācintāma(3)ṇiratnanidhānasya pratilambha iti (/) avika-
lpadhātuspa(4)rśanāyā etad adhivacanam · iti hi kulaputrā (5) 'nenopamopanyāsenāvi-
kalpapraveśo 'nugantavyaḥ (6) katham punaḥ kulaputra bodhisatvo mahāsatvaḥ etā-

74) upadhmāṇiya.

(7)ni yathāni(r)diṣṭāni vikalpanimittāni vy[u]paparī-

[1675] (12b) -kṣamāno 'vikalpadhātum praviśati • evaṁ avikalpadhā(2)tupratiṣṭhito bodhisatvo mahāsatva(!) rūpam iti āmu(3)khībhūte evaṁ vyupaparīkṣate (/) yo mama rūpam iti cara(4)ti vikalpe carati • {carati • } pareṣāṃ rūpam iti carati { • } (5) vikalpe carati (/) rūpam utpadyate niruddhyate saṃkliśyate vyava(6)dāyete(!) iti carati vikalpe carati • nāsti rūpam iti (7) carati vikalpe carati ///

[1676] (13a) nāsti phalato 'pi nāsti karmato 'pi nāsti yogato 'pi (2) nāsti vṛttito 'pi nāsti rūpam iti carati vikalpe carati • (3) vijñaptimātram rūpam iti carati vikalpa(!) carati • ya(4)thā rūpam nāsti tathā rūpapratiḥhāsā vijñaptir api (5) nāstīti carati vikalpe carati • yataś ca kulaputrā bo(6)dhisatvo mahāsatva(!) rūpam iti nopalabhate • rūpapa-

[1677] (13b) -tibhāsām api vijñaptim nopalabhate • na ca sarveṇa sa(2)rvam vijñaptih(!) vipraṇāśayati • na cānyatra vijñapteḥ ka(3)ścid(!) dharmam upalabhate • tāṃ ca vijñaptim abhāvataḥ (4) samanupaśyati • na cānyatra vijñapter abhāvam sa(5)manupaśyati • tasyāś ca rūpapratiḥhāsāyā vijñā(6)pter abhāvam • tayā vijñattyā(!) naikatvena samanupa-

folio 14 missing

[1678] (15a) -ramitāyā dhyānapāramitāyāḥ prajñāpāramit(2)tāyā{d} evaṁ śūnyatā-dīnām(!) yāvat sarvākārajñatā(3)yā yojñam*(!) // iha kulaputrā bodhi[sa]tvo ma(4)hāsatvaḥ sarvākārajñatānirūpaṇā(!)vika(5)lpe āmukhībhūte evaṁ vyupaparīkṣate (/) yo mama (6) sarvā(kā)rajñateti carati sa vikalpe carati • pareṣāṃ (7) sarvā(kā)rajñateti (carati) vikalpe carati • sarvākārajñatā i-

[1679] (15b) -ti carati vikalpe carati • sarvākārajñatā prāpya(2)ta iti carati vikalpe carati • sarvākārajñatā sarvā(!)(3)kleśajñeyāvaranāprahāṇāyeti carati vikalpe ca(4)rati • sarvākārajñatā(yā nā)nyat t(r)ai(dhātu)kānta(!) =lacuna= evaṁ hi kulaputrā (5) bodhisatvo mahāsatvo 'vikalpadhātupratiṣṭhito bha(6)vati • asya kulaputrā dharmaparyāyasya udgrahaṇa (7)lekhanavācanād bahutaram puṇyam nanv eva gaṅgānadi-

[1680] (16a) -bālukopamātmabhāvaparitāgasya nanv eva gaṅgāna(2)dībālukopamāloka dhātuparipūrṇaratnadānasya (3) nanv eva gaṅgānadībālukopapa(!)loka dhātupari-(4)pūrṇatathāgatabimbakārāpanapūyaskandhasyeti // (5) atha khalu bhagavāṃs tasyāṃ velāyāṃ ime gāthe + + (6) -ṣata • // avikalpanayo bhūtvā saddharme 'smin ji- + +

[1681] (16b) -jaḥ vikalpamārgam vyavītya kramān niṣkalpam ā .. // (2) -ntam amalāṃ śreṣṭhāṃ vaśava(r)tisamāsamam • avika(lpa)(3)sukham tasmād bodhisatvo 'dhigacchati • // idam avocaḥ bhagavā(4)n āttamanā vimalaprabhāśaś ca bodhisatvo mahāsa(5)tvā(!) sā ca sa{ṃ}rvavāti parṣat sadevamānuṣāsurasuragandharva(6)ś ca loko bhagavato bhāṣitam abhyanandan* // O // avi(7)kalpapraveśam nāma mahā(yā)nasūtra(ṃ) //